

# 品質トラブル・事故の未然防止術



最終回

## 未然防止の留意点

林原 昭

未然防止研究所

この連載は、今回で最後となります。そこで、著者がいま取り組んでいるセミナーや企業研修の受講者からの疑問および最近の事故事例を参考にして、未然防止の留意点をお伝えします。

### 未然防止活動実行の動機づけ

セミナーの受講者から、「再発防止は実行しているが、未然防止ができていない。どうすれば、未然防止を実行するためのモチベーションが生まれるか」という質問を多くいただきます。再発防止は実際に起こったトラブルに対する活動なので、取り組みやすく感じます。

一方、未然防止は将来のリスクに気づくところから始めるので、活動のきっかけをつかむのが難しいかもしれません。さらには、起こってもいないトラブルを未然に防ぐことを定量的に評価するのは、簡単ではありません。そこで、どのように対応すれば、未然防止活動をスムーズに実行できるかについて、お伝えします。

まず、未然防止活動のきっかけについてですが、未然防止3ステップ対策を何度か解説してきました。この3つのステップを途切れることなく、連続で実施してください。

まずは、トラブル発生後、第1ステップの緊急対応、第2ステップの再発防止を実行した後、時間的な間を置かず、第3ステップの未然防止に取り組みます。そうすれば、未然防止活動に入りやすくなります。

次に、未然防止活動の定量的評価ですが、仮にリスクに気づいて対策し、想定したトラブルを未然に防ぐことができた場合、過去のトラブル事例

から同程度の事案を参考にして、トラブル対策のコストを推定します。このコストが、未然防止活動による定量的な評価(効果)となります。

この効果金額が、先行投資としての未然防止活動の原資という位置づけです。未然防止活動を継続することで、この活動で発生するコストを上回る定量的な効果生まれ、企業の利益増大につながっていきます。

3つのステップを特別に意識することなく、継続して実行できる体制を築いていただければ、未然防止活動が確実に定着していくことでしょう。

### ダブルチェックは有効か

多くの現場で、2重3重のチェック(検査)が実行されています。その理由は、1つのチェックだけでは不具合の検出漏れが発生するので、その検出度を上げるためです。はたして、ダブルチェックは有効でしょうか。

確率論からいえば、チェックを増やせば、不具合の検出度は上がります。しかし、逆に検出度が下がることを、著者は実際の現場で体験してきました。

なぜ、検出度が下がるのか、それは、複数の検査員の間でお互いに依存心が働き、意識せずとも、チェックの手抜きが起こるからです(図1)。

不具合の検出漏れが発生している時、いきなりダブルチェックを導入する前に、なぜ検出漏れが起こるのか、その根本原因を追究してください。

たとえば、検査項目の抜け、検査方法の不備、検査OK・NGの判定基準のあいまいさ、全数検査すべきところ抜き取り検査を実施し検査漏れが発